



新板
繪入

老子形氣
二

13
2730
2



門 13
號 2730
卷 2



老子形氣卷之二

氣之冲神陰神也合之事

氣に冲は平づりのまがくと肥る人合はれ
神何れも別がくこと老に神核極めて成り
もあつぬる病よしては浅茶色を母るふ又
るふ十陽の瘦して色れ相なく目むりき
る有髪れ乱れしは油付くとも女男の
政ふあり老にたりて通る城を白そる
何れやと尋げしは瘦男う白いつた
浮成なりを病い又何方を切るや我
我楽は是

老子形氣卷之二

控置れ悪の夕あーき一見致しそれより田舎在
 出うけやぐとどむをまら合点のゆめゆめ
 先き指の婆娘これ脚もんことまふては死坊
 る笑て曰今い何さうは心むる我こそ癡癡辨ふ
 だまげり只今去くことまか け酒守の醒ぬ中
 表申へまより物く麦飯は致さぬやとありて
 完賢人ふかゝる事としを瘦男とてまよ拍
 かりしものよかりしもの出合し 我も致し
 多々魁なり是より幸無く互れ志と悟屋
 まづくおあま

鏡や一人の志望のく誇んえ海

わの身の上れえぬ水い

と年ん獲られハ家財とゆ一並てやも望
 れる方あれどもき指の家業とてりとしてんく
 あいまを致しぬ邪見たり事やとソを存
 くそれおまき夫のる若らぐいとあつ仁心の慈
 悲心のとりえ人成何とまむむらぶらとめく
 大びりしれりかろく 今の世も務れまぬま
 焉うそ仁者ありまのはを報ひふて未承に知
 ば世もく借金の劇は流じのじと我先所

度勝神の説ありとれやどの説なりや一
院乃御宇也保三年此よりとよ夫ふ人と
あひくは六月九日紫野に於て度勝の社を
建立ありし藤原長能の方よ

今もそんたあつてのらんまうしあすあ

これ乃都よ社こつめい

かくらましとををこれよりし我ふも神の北乃
あつて立財を成てまび人の親れ神(聖)
とりても次氣中へ取付て子れ猶今しと
親の昔芳葉してあつしと芝居ね着

ふりたもあつて西の懸よあつて居れい
た七世孫ひ氏神よりと地を吾孫致とゆ
後のとく此積地なり又人間のあふりて
見給へ唐の不便のとり幸一生免ぬ乳と
れはよりひ路も各番悪心奴でありれい
ありがしし正通のて懲昌するたす
中めも又あまのこあまのこ不
と乳のこがしし家も成ま入る
從文乳利是金世孫傳令成
るん派せ凡ん穴あはしめり
るん派せ凡ん穴あはしめり

今も此はくまにまはれり後より鬼のせめ
 来り本とすすの大抵はまはるき花欲者
 御分限者と云ふやうなはし等なり寝てん
 扱又自らが家業よりもまをたてん隙
 としつゝ一某をたたりや命を死ても子は
 そのら目物もそれど去りの日小疎し
 忠てそれありけりまをたのは家内奉てす
 夢目程候及ぶまれの幕下りもなふん強
 としゆり瘦まがり日沙不露の類を也
 ぬまの合納り亡事扱者其合納と集ひ

まへて是れど速懸りなりなりなりなり
 足多減亡りどの合納は扱者か自由小
 と死すよそのなり今よりは道方福乃
 神小ぬてめく根根ら致さぬ一文でも
 我も小入のなり一茎はりを奪と一物株の
 菓と食とありひ言はまもなく代たて
 一敷に疑伏すりまのら方た也御れも
 系が作爲れ扱よひあすせふりなり一
 之更文と作て秘法罵ると思ひ人
 休之年始より四季おくるの祝も残ふとて

りらう内一登あし之ぬむれひすん解や酒の風
 味もあつと年中倍減をひのうまは後とそん
 貧乏の神とん雅かほけしゑたりだやと倍り
 切まふ小目いれと一筋よあまん坂みなりぬけ
 夢のまぢりた楚西代帝の迎ひりとありぬ等十
 間たり下て夢のうとあふ小堂を名はるあ旨
 本乃極仙常たりと一と名りうら賀之神が白
 おも成えん也 濟世の袂と蘇 南菊は葉底に
 満樂之葉耀乃旨味が輝とありをて賀翁
 若芳すりとのハ若芳福は先達て樂て垂るあ

山(若引)すまへん根より一我志はそのやうふ
 安んず事もあけまへ只妙しくともなる後乃あ甲
 髪たぐ食ことなるは先だ柳は徳丸は身の上ま
 此れはどいうらうひそのら賀之人もさうなりと垂
 相違果ゆやと煙魔同士が切のり源ゆくをも寒
 独り老翁忽然と来り瘧疾神と白服日抄は海江
 暴虐をさしひるまひ約た後格のあゆましく非
 通利欲心のく性根をうけし人乃嘆成之る念を
 そとひ財乃携ひひ固て人は教の運用ひらた
 何ぞ天に着るるや人盛めして天に帰天極

て元^{もと}よりかつ^{かつ}終^{はつ}といふ本文あり一は身^み成^{なり}たり
成^{なり}終^{はつ}たりとも天^{てん}の界^{かゝ}りし^し川^がをり人^{じん}海^{かい}は負^おへ
や終^{はつ}は終^{はつ}歎^{たん}乃^の身^みし^し際^{さい}来^きらん

成^{なり}終^{はつ}つこて人のい^いこ^こな^な——身^み成^{なり}

命^{いのち}は情^{なさけ}こ^こま^まのこ^こ——身^み成^{なり}

おりの造^{つく}れあき^{あき}の鳥^{とり}歎^{たん}一^{ひと}美^みなり^{なり}ん^んな^なれ^れ地^ち
孔子の一生^{いっせい}の間^ま身^みを^をこ^こま^まさ^さば^ばは^はと^とあ^あけ^ける^る
の^のと^と怨^{うら}也^やと^と人^{ひと}は^はと^とく^くら^らま^まり^り怨^{うら}とい^いふ^ふ
之^{この}い^い遠^とと^とす^する^る事^{こと}し^し則^{すなは}ち^ち文字^{もじ}の^のふ^ふ乃^の如^{ごと}く^くと^と言^いふ^ふ
命^{いのち}も^も文字^{もじ}小^こて^て和^わ諧^{わい}な^なと^とけ^ける^る方^{かた}と^と後^{あと}て^て我^{われ}も

者^{もの}の^の事^{こと}の^の人^{ひと}も^も否^{いな}て^てま^まと^と朽^くる^るり^り事^{こと}の^の小^こなり^{なり}
簡^{かん}し^して^て人^{ひと}の^の事^{こと}し^し又^{また}負^おは^はる^る己^{おのれ}の^の事^{こと}人^{ひと}家^{いへ}上^{の上}の^のり^り
牛^{うし}の^の骨^{ほね}は^は地^ち黄^{わう}島^{とう}は^は大^{だい}根^{こん}と^と植^{うゑ}は^は同^{どう}く^く大^{だい}根^{こん}が^が化^け
黄^{わう}と^と吟^{いん}ふ^ふ乃^のは^はあ^あく^くぬ^ぬも^も自^{みづか}然^{ぜん}と^と瘁^{すい}甚^{じん}あ^あの^のこと^{こと}
大^{だい}根^{こん}は^は又^{また}外^{がい}の^の材^{ざい}あ^あれ^れも^も己^{おのれ}の^の事^{こと}に^に於^おて^ての^の微^い塵^{ちん}程^{りやう}
も^も死^し柄^{がら}な^なく^くも^もよ^よふ^ふ人^{ひと}乃^の命^{いのち}を^を棄^すひ^ひて^てま^ます^する^る
と^とい^いた^たる^るれ^れど^ど盗^{たう}人^{じん}の^の事^{こと}は^は負^おは^はる^るり^り起^おれ^れる^る事^{こと}
於^おて^て飛^とあ^あさ^さし^しとい^いへ^への^の世^よは^は世^よに^に於^おて^ての^の高^{たか}賈^がは^は
ても^もな^なれ^れる^るの^の私^し業^{ぎやう}を^を防^{ぼう}め^めあ^ある^る事^{こと}も^もな^なけ^けれ^れど^ど不^ふ
仕^し合^あふ^ふて^て負^おは^はる^る事^{こと}は^はな^なれ^れる^る彼^{かの}天^{てん}命^{めい}と^と是^{こゝ}の^の事^{こと}



魚のまじりも故は人の目を操位を貪りては
 らぬて安樂と称ひ世果は方終令少に合綱を
 と纏ひて人惑に入た人又損りてをまじりの
 汝り同類なりを世は又棄すれど此とて大
 のく妙人も固執すれど智恵は後よをまじり
 事に迫りては子おりも強引して行りぬ飛人
 かりては自害首指てい淋命と遠りまらう又
 の蔭主人乃愚小ては齒ぐりともあはれども福に
 りりては十分一も足ぬ老も多けれぬと汝がまじ
 小あはれ汝等と終りやんた知の中と逐逐は余

志しごとくを者大少懸き地上平依し何は志
 と改め命戒よ改りんとりよ終自告事は身を
 ひとゆりしを遅く改ゆりては又時々お非
 悔て行と改め我道ふ志とがら何れ教訓は
 まいられなり又汝等も旧態と改めなれ終
 終らん事いさる海しさいこれまじりあふ
 うまじりあふこれの世乃むりまじ
 らし下下に月をまじり
 老いぬく世のひらりとあまふ
 老いぬく世のひらりとあまふ

先人の世にあり幸無業(目お心付な)はを
 裏に考て辱るに振ふと(身守り)との務
自ぬ振ふと(附白)のちまぬ振ふと
 お母丁で尺(獲)を標的にせよ(伴人)と云を
 居あはしむくにふくむけ(何)なりても忍
 害つら幸あり(は)おれ(不)を(ま)す
美(是)より大なる(は)なり
不浄所方角ニヨリ名カワル
東ニ右ヲ東筒ト云西ハ西浄
開所ハ惣名ナリ
 我(身)と云(不)なり(と)下(り)
 汝(ま)く(長)久(と)そ(る)上(方)宮(居)の(地)より

ら(ま)る(下)は(人)の(居)る(難)は(と)基(と)ら(わ)
 ま(り)れ(と)又(滅)せ(れ)ず(入)来(附)ら(安)か(ら)ざ(れ)は
 お(切)附(ら)ふ(と)お(り)ふ(わ)は(是)を(功)と(せ)る(功)
 成(念)遠(て)身(退)は(天)の(道)と(て)云(雲)沙(し)し(て)
 呻(り)け(れ)

夷子後住例せし半

或(人)は(夷)子(後)住(例)せ(し)半
或(人)は(夷)子(後)住(例)せ(し)半
 世(間)小(て)と(料理)客(意)を(と)り(て)暇(し)き(時)と(て)
ぐ(と)我(を)我(も)ん(づ)ら(り)も(と)お(り)ふ(と)け(り)困(窮)ふ
 或(り)素(服)を(り)も(又)は(世)に(を)め(て)あ(る)が(ら)

松の葉といふは是なりともも菓子へ上りて人として
 糠を熱して備へけりふもぬまり候と供合はく
 得くの強を御ふとくは是く不富貴の成しと
 あり申けりこれより佳例なりとて世に毎に
 く糠と煮て備へけり申すは多し多し多し
 きてのありく先をぬり候て候へり候へり申
 く一口も喰れぬ扱なりぬは女が貧窮れり候
 ざりと感ずて不便とありひ福祿を守り候へ
 一ふ赤例とて又來り年もくも子を糠を煮て
 候ふに候は秋を亂同におたり候へり申す不

百廿方ん世くれ米一粒の貯けき時々りり
 糠も孫孫とあり候へり候へり申す不困
 窮の時れ例を用ひ候へり申す候へり申す
 り候へり申す候へり申す候へり申す候へり申す
 よまぬも吾あはり人も吾也人の喰れぬ扱を神も
 喰れぬは女もいゆに折角ふ福を授けられぬ家内の
 下下の一箇暑く候へり申す候へり申す候へり申す
 喰ふきく候へり申す候へり申す候へり申す候へり申す
 是れ生して喰れぬ候へり申す候へり申す候へり申す
 候へり申す候へり申す候へり申す候へり申す候へり申す

相の教を定て家松と興一宮東あれはに先
 づりり池をとけく一 弟瑞是ふ准一人徳ふ
 ろうかくは臨江なりとあり鶴の口をれどもふに
 もづれて部各も又美の道なり家東あども合
 けよめてもこの季の西江強懸といひつけ徳をおす
 の類阿さまきん根し 専ら徳を合ふ徳て
 上より中へありしやとてはあつた一人は家東
 百万乃家松も力とすりふいさ人ふる延在帝をさ
 東は御衣と脱衣の御殿より投出させ給ふと好家
 極珍改良修公乃おふも

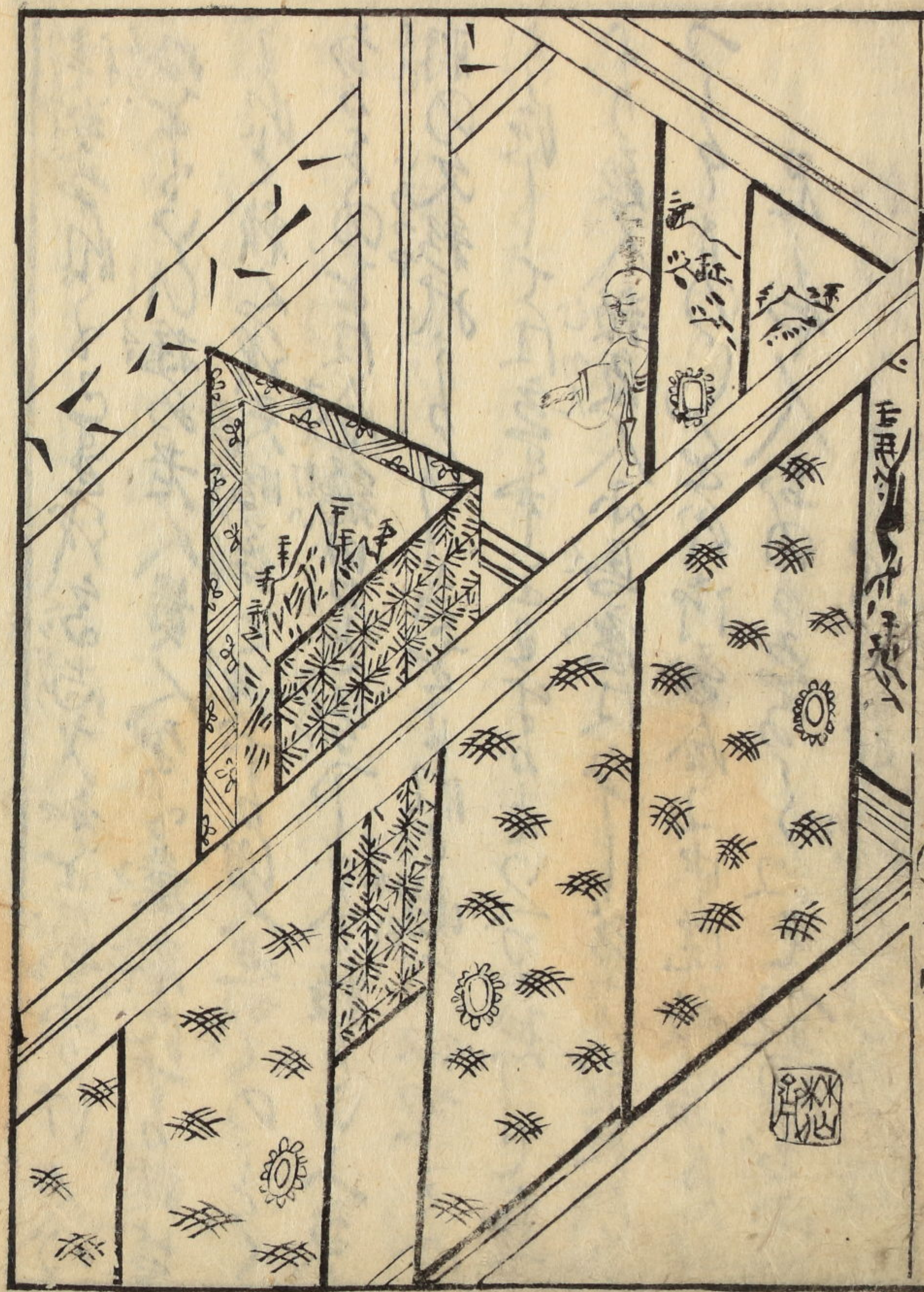
杞りへゆき袖くうあけ世世共申ふ
 さむけ交民れ少ゆのよまく
 と徳せしも我にうくべて中浅ありひやりあふ水
 や汝今より中浅改めずんば忽りといふ方に野ん
 と宣ふとありとく愛さわけまはた大工整はあ
 水と悔て中浅改められぬ家整昌強ありけり
 又そ通途に同一く部各りのわり家上ふ合
 け野あれども所ふ合さ衣類あつく十子ふる万
 経言あま先喰ふ事と懐て笑ふのく一子
 の娘は是も所代のよりさふ縁付人なり

抱入多しとてを自言し一の老ふ婦しける或人
 語活ていし抱をえは抱と大金をひの大氣との世
 小例希ありといふを彼老人是ハ怪る事取抱は
 某り簡畧致と語る方挨拶と立後しけれはこれ
 此の事し世間ふて凡其元成續しと續れは我
 等たさんあはれ一生のうらみ成りてあ夜を
 恙と食物も喰すりしと而持あされても死する
 時と後六文のともや老子を成くさきとおりり
 そ財と何もかも推丸めて他人の婚殿ふやう
 は大金をひの大氣のといふ小老人うらと願法

突見感入ヤし只今までの大金を指さるるも
 指さるる子ばさきも同し事今生より陰鬼と
 中ハ別新事なり悟ひくまきいとてこれるを衣類
 るとは立まぬりりとも松山殿ある寺ありと二三
 多も樂しと中の人とありぬ突見りとも柔
 なれと通ずる事は
 女智は身乃仇といふ事
 凡才智何のそのとあむと身は毒也日経の智は
 世為れ後の智ありて大となり小とあくゆる
 ざり事なりと女知れりて事ふ流りおふ福で

修くと廻功の生長一々方邪知あり故小肝要
 此本不於ても同し合りて改めて抄し酒よ
 應しと己成れたる事多し一々本首尾
 好しれく推して酒の辨本を成証そのん
 所子とかりゆもく人と類ふ合すると云
 同し合て世ともしり世事想身工使冷人成
 能て目成送り終は不都合後の切ると云
 室もい決りの老の折紙付とかりて似もこれか
 勢ひる間ら横曲ありて子推進れた下り坂ふ
 と重所あり一重久云雲め更を言なく世事も

津波をぬぐひて世成る尚文知と鼻ふりけ人分
 好まのいひ孫め老人貴人をも備忽にする類皆
 主此と我ん成天晴音と慢ずりゆ人也のめとく
 ありまのを片合鷓男と号下し合雜との多
 眼の文彩れりけりまをいれと慢て水ぬぐふ
 う流しては立事とすすかといつと想して古
 有り悪人教及人小馬鹿はる一皆文習にひき
 つまりのこしを代清方合工中院殿と申ん
 見えや人おのりあるぬをれのおふ
 折行くさおくお路乃むむ枝



言葉のふみさうのいふは笑れ程といふ事

玄葉のふにさうのいふは笑れ程といふ事
知老はいつたりよまのちあふるむ一玄は味ひ光
お親しまれお味まれお貴まれお権しまれ
お急袋の庭ぐしきてんぐくまきまのこ
凡我ち地も書書用も致と公家附合うも
さうぬ徳でも三徳で更誰り働たりもさ
おせり人乃何するよりさうさう務れと
ふ殿の村根と鼻の先んき去用と推母と
うちの不足とさるへ一気も平なりとを
破れとつよつよしは成りひびりてて大食

破れとつよつよしは成りひびりてて大食
して食傷するも身をむすひつらあまりふさ
瘦白瘦がさして人ふ急と清らもゆるまの也
人ふ急するりの曲としておれ人ふ急し
と事なひひとりの目のおふてたある
は急し穢しとすの推あり一我あは
人の目色ても推急と致との怪めと拘限
味噌氣め
享保の末元文れりしめ比より江戸の
時花ことなよ自瘦するやみとよ
とりよ由来
或人の日江戸めく味噌屋りゆいと名物と蓋是
然と初強附會り説かり又或人を

書し下りと笑ひ罵しきく予り曰古人の詩小愁殺人
 とる唐の代乃俗語なり日本みて美女をえんて凡
 人こりやと譽も是ふ志る更之葉擁柄よりして子
 りくげく也と譽も是ふ志る更之葉擁柄よりして子
 細く割懸る人をも却ていひて之族佐
 あるまのし先之筆乃乃時ゆしふ
 自慢がなりしつるおろし
 賢けり天祥めきくおろし
 のくのとく附り凡俗しく面白事し世
 凡世氣味の人同か伏出るりのなり一向阿
 房をれを邪氣も多く人の害もなる凡今
 用ひもせば塩絶よ湯漬冷やとおり人圧毒も

業よりあつぬと凡勿解類の人幹たよハハを
 お徳も小氣と賊人の妨成不顧より多
 扱はね成るものふかざりて各番なりりのなる
 客者凡類の多く疑の流しひ者凡各者一あ
 一見て悟る一くち人小附事やとこに
 月より大根おる一み碧油けりて冷やといと
 口より下りはよげせども終にひし小疎なりい
 等の人を皆弱は強の根めて強ハ弱小割せ
 らるるとりよ道理をよめり起て秋慢乃
 蔓り伸よて其上に人よりあつれさがり戸

取くよ為味り付て人を目八分よ見らるる
此病生し

老子形也二終

